

詩的純度の高い歌く鈴木加成太『うすがみの銀河』

伊沢 玲

短歌を読むようになってどれくらいになるのか。暇さえあれば何かしら開いている。数多くの歌に触れ、それはそれで嬉しく幸せなことであるけれど、以前と比べ、とても速いスピードで歌を読むようになった自分に気付き、すこし悲しく思うことがある。一首一首の歌に対して、申し訳ないと感じてしまうことも。

そのような日々において、あらためて一首ずつの歌を、間隔を置いて、一編の詩のようにゆっくり味わいたいと感じる歌集に出会った。鈴木加成太の『うすがみの銀河』である。一九九三年、愛知県瀬戸市に生まれ、二〇一五年に「革靴とスニーカー」五十首により角川短歌賞を受賞した作者は、現在「かりん」に所属している。十七歳から二十八歳までの作品を収めた第一歌集『うすがみの銀河』には、みずみずしい感性による歌や、独創的な比喩的印象的な歌が、抜粋することなど無理かと思われるほど並んでいる。

園丁の鉢しづくして吊られおり水界にも別の庭もつごとく
ささやかな焚き火へ木屑足すように色鉛筆の香を削りおり

一首目、園丁がいるほどの大きな庭園の隅に用具置き場があり、植木鉢から水滴が落ちていく。雨上がりなのか、あるいは使い終えて洗った直後か、光を受けて美しい様子が目に留まったのかも知れないが、たいていの人は素通りしてしまう場面である。しかし、そこから作者の想像は一気に水の世界へ跳ぶ。その跳躍力に目を見張る。花々や緑のあふれる現実の庭とは別に、水の中にも美しい庭があり、そこを手入れし付けるのではなく、「こんな想像はいかがですか」と差し出すように。わたしには、水中に揺れる花々とその回りを泳ぐ小魚の群れや水面から射す陽の光、細かな気泡などが思われる。この歌に出会わなければ、思い描くことなどなかった美しい景色である。二首目、やはり想像の飛躍が素晴らしい。「色鉛筆」と言えば、北原白秋の〈草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり〉が思い浮かぶが、この歌では木の香りに焦点が絞られている。「色鉛筆を削り」ではなく「色鉛筆の香を削り」としたことにより、木の香りがたち、「木屑」や「焚き火」への連想がより一層実感を伴ったものになる。

宇宙時間息づいている公式を黒板消しが粒
子へ返す

缶珈琲のタブ引き起こす一瞬にたちこめる

湖水地方の夜霧

一首目、数学か物理の授業の場面。上の句と下の句の対比に注目したい。ひとつの公式が導き出されるまでには、多くの先人の知恵を受け継ぐ膨大な思考や、延々と続けられる計算が必要であるが、そうした時間の成果である公式の重みとチヨークの粉の軽さとの対比、構築と消滅の対比、理論と現実の対比が鮮やかである。二首目、こちらも生活の中のごくありふれた行為から歌が生まれている。寒いときに缶珈琲を開けると濃い湯気がたちのぼるが、そこに作者が思い浮かべるのは、イングラッド北西部の湖が連なる美しい渓谷の夜霧である。歌を詠む際、心を解き放ち、思いのままに発想を飛ばすことの楽しさを教えてくれる。

火を盗むならば夜汽車の深部より、風は帆
船の白き胸より

この歌の発想もまた非常に魅力的である。夜汽車から盗む火とは何か。暗い夜空の下を力強く走る蒸気機関車。その火室で燃え続ける石炭の火のような情熱であろうか。帆船がはらむ風とは何か。遮るもののない広大な海を渡る風、すなわち自由な心であろうか。あるいは、陸の風とは違い、塵や埃のまざらない澄みきった風、すなわち純粹な心であろうか。そのような力強い情熱や、純粹で自由な心が欲しいという心象詠として受け取りたい。

七夕笹を母と担いで帰りし日 うすがみの
銀河がさらさらと鳴る

歌集のタイトル歌であり、あとがきに次のようにある。

「幼稚園の七夕祭りで初めて笹飾りを目にしたとき、未知の甘く哀しい感覚が胸を打ったことを覚えていた。僕の詩の原風景の一つとして、ささやかな記念にこの語を選んだ。」私たちの誰にも、何かしらの原風景があると思うが、幼少期の思い出を大切に守ってきた一首の歌に収める力、長い歳月を経て変わることはないイメージを自分の核として持ち続ける力の尊さをあらためて思う。

二〇一八年、作者は就職を機に「かりん」に入会し、旧仮名遣いの歌を詠みはじめる。

椅子高き深夜のカフェに睡りゆく銀河監視
員の孤独を真似て

カフェの腰高の椅子に座ると、足が床に届かないからか、どこにも所属していないような、心許ない感覚をおぼえる。また、ビーチサイドの監視員も然り。遠くまで見渡せる高い椅子に座り、楽しそうに遊んでいる人たちから離れた立場で、ひとり任務に当たる。「銀河監視員」という言葉は、無限に広がる空間と向き合う、途方もない孤独感を思わせる。この言葉を生み出した作者の創造力はどこから生まれるのだろうか。孤独を強く意識する、詩の源泉を思う。

吊り革に百の手縊れつつ雨の永田町へと吐
息は向かふ

朝の満員電車の中、大勢の乗客の手がまるで首吊りのよう

に描かれ、現代社会に働く人々の疲労感、場合によっては死と背中合わせの深刻な疲労感を詩的に描写している。二句から三句への句跨りに、その息苦しさが出ている。この頃からロマンチックな世界だけでなく、現実世界の翳りにも目を向ける作品が増えてゆく。

世界が悲を母がちひさな団栗を呉れるのだ
やさしい子だからと言ひて

掻き消すためことばをつかふ日のをはり灯ともし
に痺れ蛾がまはりゐる

一首目、母親のこまやかな愛情に包まれて育った幼少期が浮かぶ。「やさしい子」は、やがて繊細で敏感な少年に成長し、人よりも多くの悲しみに気付きながら、感性豊かな歌人になったのだろう。下の句の大幅な字余りに、この世界に尽きることはない悲しみに対するやりきれない思いや、無力感のようなものが滲んでいる。また、小さい団栗と大きな悲しみとの対比も印象的である。二首目、言葉とは元々、誰かに何かを伝えるために残すものであったはずなのに、目まぐるしい現代、ことにネットの利用が一般化してからは、いとも簡単に使い捨てられている。掻き消されるのは言葉であり、その言葉を生んだ人の心でもある。それらを、まるで気が触れたかのように明かりに群がって飛び回り、翌朝には死んでしまう蛾に象徴させて切ない。

けふよりあすへ疲労はほそき橋として架かる
その橋を渡りはじめつ

落葉園まぶしき昼を歩みゆけば sacrifice

といふ音を踏むお

一首目、今の若者の就労環境は過酷である。膨大な残業、休日出勤、様々なハラスメント等により、肉体的にも精神的にも疲労感が延々と続く。そのような疲労感を抱えながら、それを架け橋として、辞めることのできない毎日を送る痛々しさが伝わる。二首目、よく晴れた晩秋の公園か。木々の葉が落ちて、明るい陽射しの広がる光景が浮かぶ。足元の落ち葉を踏むと、サクツツとかシャリツツという乾いた音がする。そのオノマトベとして使った単語「sacrifice」の意味は「犠牲、生贄」である。ひと夏を懸命に働いてきた緑の葉たちも、色素を失い用済みとなれば散るしかない。命の軽さや人生の小さなさが、明るさの中でより一層つよく胸を打つ。

水中を櫛ほどの骨ひらめかせ魚ゆけり祭り

日の小川は

鈴虫の夜はおもへり錠も透くる硝子建築の
なかの暮らしを

一首目、ふだんとは違い浮き浮きとする祭りの日。しかし作者が詠むのは、賑わう神社や通りではなく小川の魚である。魚が見えるほど水の澄んだ、明るい時間帯のきれいな小川。そこを泳ぐ魚の骨の繊細な動きを想像している。ものごとの周辺に目を向け、また、肉眼では見えないものを透視しようとする姿勢を感じる。二首目、鈴虫の透きとおる声から、壮麗な建物を思い描いている。何もかも透明な硝子でできている住まいの暮らしには、美しさと共に、私的な空間が全方位から見られてしまう緊張感や恥ずかしさ、衝撃が加わればた

ちまち砕けてしまう脆さが同居する。その感覚の世界に息を呑む。

コンパスの針しらかみにおとす手を支へて
くれてぬし あるてみす

円陣の円に入れぬ少年のわたしが統べてゐ
シアキアカネ

眼だけでする会釈のうつくしいひととゐた
り真冬の楡に凭れて

一首目、コンパスを使い始めるのは小学三年生くらいか。その年頃の男の子の繊細な恋心を、震えるようにあらわす。アルテミスはギリシア神話の月の女神であるが、針がずれないようにそつと手を重ねてくれたのは誰なのか。憧れの先生か、隣の席の女の子か、それとも作者の姉か。〈姉との婚うたがはざりし日よ小さき雪のうさぎに南天を嵌め〉という歌もある。二首目、元気な子たちの勢いに気圧されて一歩ひいてしまふ、引つ込み思案な少年の姿が思い浮かぶ。少年の間は群れをなして飛ぶアキアカネであり、そのリーダーであったという。自分のさみしさを埋めるもの、心を開くことのできる世界を持っていたことがわかる。内省的で思索的な歌人の芽がうかがわれる。三首目、この歌集における数少ない相聞歌である。言葉を交わさなくてもお互いの気持ち伝えるられる二人。真冬の引き締まった空気や楡の木の間々とした幹から、清潔で誠実なイメージが感じられる。これら三首、遠慮がちに詠まれたプライベートな歌にも、詩心は豊かに息づいている。

以上、到底書き切れないが、作者の個性のよくあらわれた作品を挙げてみた。その特徴として最もつよく感じられるのは、日常生活に根ざした場面やものを詠んでいるにもかかわらず、その歌には俗世間から遠く離れた雰囲気があること。そしてそのような世界へ読者を連れて行ってくれること。また、透明感のある詩情が、読み手の曇った目や心を洗ってくれるように思われることである。さらに気付くのは、若い作者でありながら、その作品にはどこか懐かしさが漂うことである。日本の詩人が西洋文学の影響を大きく受け、さかんに創作をしていた時代の浪漫的な趣が感じられる。作者の詩情のゆりかごなのではないか。

地に足のついた歌、生活や人生を見つめる歌を詠もうとして日常生活の中から題材を取ろうとすると、つい、「こんなことがありました」とか「こんなものを見ました」などと、日記のようなものを書いてしまいがちである。日記以上の歌を、誰かの心を動かす歌を詠むためには、たとえ日常がベースであっても、詩的で独自性のある表現が求められる。誰も気付かないような細部、周辺部、深部、あるいは不可視なものへ視線を向け、発想を大きく飛躍させる。そして何よりも、自分らしさの核となる、原石のような感性を持ち続ける。言うのは容易いが、実に難しいことである。今回ここに挙げた詩的純度の高い歌には、そのような創作態度を大切にしていく作者の精神がはつきりとあらわれている。